



贗作幽靈包圍網

tontokaimo39

賈作幽靈包困網

「ねえ恭一」

「うん？」

夕子は普通なら、恭一‘と呼ぶ、上に、ねえ‘が付くと注意報、それが笑顔なら警戒警報、彼女は私の懐具合をよく知っているので、金銭的な無理を言ったことはほとんどないが、私にとってはそれ以上に困ることを頼んでくるのだから油断できない、学園祭の講演会で講師の代役に引き出されたり、劇の練習のための相手役をさせられたりと、たまったものではないのだ。

「教育学部にね、児童文学研究会って言うのがあるの、略して児文研、その人たち小学校などへ行って紙芝居や人形劇、それに演劇なんてやってるのね、学生のうちから子どもたちに触れ合うことと子どもたちに喜んでもらうのが目的ね」

「ふうん？」

「今度ある学校で劇をするんだけど、恭一に出てもらいたいって」

「何だと！児文研かチャウチャウ犬か知らないが、どうして俺が？」

「児文研の部員女性ばかりで男性がいないのよ、で相手校との打ち合わせの時『男性の刑事さん役が必要なのですけど女性ばかりで、先生の誰かに頼めないかしら、そうだと本当の刑事さんに出てもらえたら盛り上がるわ…』と言う意味のことを話したのね、ところが相手の先生何を勘違いしたのか、子どもたちに『今度の劇は本当の刑事さんが出るぞ、楽しみだな』と言ってしまったと言うの、児文研困ってるのよ、楽しみに待っている子どもたちをがっかりさせたくないって、で、『そうだと、

ミス研の永井さんに頼んだら』ってことになったわけ」

「冗談じゃない、女性でも変装すればいいじゃないか、それに部員でなくても誰か男性に頼めるだろう」

「子どもってね、意外と鋭いのよ、男性に頼んでも『あの刑事さん若すぎる、やっぱり大学生だぜ』ってことに、その点恭一だとピッタリじゃない『お年寄りだから、学生じゃないわ、本当の刑事さんかも』なんて」

「このやろう！一言多い、うんそうだ、交通班に頼めと言っておくんだな、あそこなら交通安全教室で学校に行ってるのがある」

「もう頼んだそうよ、でも同じ日に先約があった」

「ううん、そうか、よし」

「恭一、やってくれるの！」

「ああ仕方がない、だが俺じゃない原田だ、彼ならピツタリじゃないか」

「そうか！原田さんね」

「夕子から頼んでみる、それならまず引き受けるさ、それでも嫌というなら弁当三人分出すと言えば確実だ、俺は交通班と同じように公務で行けるように課長に交渉しておく」

という次第で学生たちと一緒に小学校を訪ねた。餅は餅屋と言う言葉があるが、さすがだ、文学部演研の成人を対象にしている演技とはまた違っているが、児文研の演技は、子どもたちをぐんぐん引き付けていく、いよいよ原田登場、警官

の制服がはち切れそうな原田の迫力に子どもたちは最初驚いたが、やがて拍手喝采、泥棒を追いかけるシーンなのだが舞台だから早く走るわけにはいかない、そこで泥棒も警官も足踏みをして走っているように見せるわけだが、原田の方は走ると言うより四股を踏んでいるのだ、ドスンドスンと舞台を一周、おい床が抜けるぞと心配した時、ツルリと足を滑らせて大きな尻餅をドサン！これに場内はもう沸きに沸いて大喜び。

「ありがとうございます、子どもたちがこんなに喜んだのは初めてでしょう、あつ私はここの校長です、部屋でご挨拶をと思っていたのですが、貴方方がすぐここへ入ってしまったのでつい申し遅れまして」

名刺を渡させたので私もそれに応える、

「警部さんですか、で、出演してくださいさった方は？」

「けちな警部について苦勞している刑事ですよ、原田と言います」

子どもに取り巻かれながら原田が大声で答える、
「何を言う、いつも昼飯をおごってるじゃないか」

「一杯だけじゃないですか、三杯は欲しいのに」

「ハハハ面白い刑事さんだ、でこちらは？」

「私？永井です、頼りない警部のためのアシスタント、原田刑事と同じで苦勞していますの」

「こら、二人していい加減なことを言うな！」

「ほう、アシスタントがお付きですか、それじゃあ同じ警部さんと言っても、かなり上のお方、そんなお方がわざわざ…」

これを聞いた児文研の学生が『へえ！見直した』
と言うような顔をしたのは一年生だろう、上級生
は夕子とのかことを知っているのでクスクスと笑
い合っている。

「児童のみなさん、すぐ掃除にかかりましょう、
今日は給食の前に掃除をします」

校内放送の音が流れ、子どもたちはしぶしぶとそ
れぞれの教室に帰っていく、

「学生さんたちには申し訳ないのですが、午後か
ら教育委員会管内の教師が全員集まる会があり
ましてね、子どもたちは嬉しいでしょう、午前中
は面白い劇を見せていただき午後は休みですか
ら」

「ええ、お聞きしています、本当は私たちもつと
子どもたちと遊びたかったのですが」

「またお願いしたいですね、あつ給食を用意して
ますから食べて帰ってください、警部さんたち
も」

「いや、私たちは弁当を持って来ていますから」

「まあそうおしやらずに」

「そうですよ、ごちそうになりましたよ」

「こら原田さん、給食をごちそうになっておいて
さらに三人分のお弁当を食べるつもりでしょ」

「宇野さんと夕子さんが給食だけでいいのなら、
五人分になってもいいですよ」

と、その時一人の教師が慌てた様子で入って来た。

「校長先生、大変なことが！」

「何ですか教頭先生？」

「と、ともかくすぐ来てください、そうだ本当の
刑事さんがいらっしやるんだ、み、見てくださ

い！」

私たちは校長室に入った、部屋の三分の一程度が衝立で区切られ、衝立の中は一組の応接セット、来客のための応接室と言うことだろう、壁側にガラス戸のついた戸棚があり、その中には優勝カップや盾などが並んでいるのだが、ガラスの一部が割れて破片が床一面に飛び散っている。何かで叩きわられたと見てまず間違いはないだろう。

「花瓶が、緑龍がないのです！」

「な、何、何ということだ…あの緑龍が…」

「緑龍と言いますと？」

「大事な花瓶です、数千万はする、あつ教頭先生、警部さんたちに話してあげてください、だがどうして…」

「うかがいましょう、盗難のようですね、しかし

ここはM署の管轄ですから、通報されるのでしたらM署へ」

「池内緑龍、ご存じとは思いますが人間国宝にもなられ、陶芸の神様とまで言われていた方ですが、実はここの卒業生なのです」

「ほう」

「思い出の学校へと言うことで花瓶を一つ寄贈してくださいました、ただ私が教頭としてここへ赴任するよりかなり以前のことなのですが、専門家が緑龍の中でも超一級品、素晴らしい物だと驚いていたと聞いています」

「それが」

「ないので、あのガラスの割れている所へ置いてあったのですが、貴方方にここで昼食をとっていただくこうと思つて、覗いたら…」

「ここは校長室ですね、校長先生は？」

「私は気づかなかった、子どもたちが体育館に入るのに合わせて私もすぐ体育館へ、衝立の中は朝から覗いてないものですから」

「ここにお入りの時、鍵やドアの様子に変わったことは？」

「何も気づきませんでした、鍵は毎朝用務員が開けて置いてくれるのです、いつもの通りです」

「昨日は確かにあったのですが、あつちよつとしたハプニングがありました、合唱コンクールで優秀賞の盾をもらい、廊下に飾っていたのですがもうここへしまおうと音楽の先生がガラス戸を開けたのです、ところが錠が閉まらない、キーも抜き取れない、私が呼ばれて見るとキーを間違えているのです、間違ったキーは何とか抜けたので正

しいキーで閉めようとしたが閉まらない、間違つたキーで無理矢理開けたので、錠が壊れたのだと思います」

「それじゃあこのガラス戸の錠はかけられていなかったのですか」

「変だなあ、錠が開いていたのならガラスを壊す必要がない」

と言ったのは原田だ。

「多分開いているのを知らなかったのでしょうか」と言つたものの、校長は青くなつて狼狽している、夕子は？と見ると破片の散らばっている床のあたりを何か熱心に調べているようだ。

「昨日は先のキー騒動の他はなににも異常はありませんでした、下校の前にも覗いたのです、明日はここを使うのだから散らかつていないかと思

いまして、花瓶を確かめたわけではありませんが、ガラスが割れていたら気づいたはずですよ」

教頭が話している時M署が駆けつけて来た。

「やられたそうですな、あっあなた方が本庁の？」

私がここにいる事情を説明する。

「それは御苦労さまです、私はM署の署長をやっているのですが、通報では本庁の警部さんもいると聞いたものですから何事かと思ひまして」

「それで署長さんがわざわざ」

「実はこの管内では同じような事件が多発していますね、本庁にも報告しているのですが一課ならご存じなくもおかしくありませんよ」

「ええ、まあ担当外ですから」

「プロです、巧みに鍵を開けて忍び込む、狙うの

は宝石や骨董類ばかり」

「じゃあ今回も同一犯だと？」

「まず間違いないでしょう、なに捜査の網は絞られています、このあたりばかり狙うのは裕福な家が多いせいでしょうが土地勘もあるので、これはいい手がかりです、そのため包囲の網はすぼまっていると見ています、まあ我々の包囲網を潜ることは無理でしょう、時間の問題ですよ」

「そうですかそれは心強い、さて、それじゃあ後はお任せしてこのあたりで、原田、昼飯が済んだら自由に帰っていいと学生たちに伝えてくれ、それから夕子を探して来い、彼女どこへ行ったんだ？」

夕子はいつの間にか姿を消してしまっていたのだ。

「は、はい、あ、あの、私たちの昼は？」

「あ、ここはなんですから、給食をどこかの教室に運ばせましょう」

「いや、弁当がありますから、途中公園にでもよって食べます」

と、突然大きな音が室内に響いた、

「な、何ですか今の音は？」

「い、いや、一課だけのちよつとした合図でして……」

三日後私たちは再び小学校を訪れ、校長に面会した、例の戸棚のガラスは新しいものに取り換えられている。

「先日はありがとうございました、子どもたちは大喜びで、ファンレターを書こうなどと言ってい

ますよ」

「あら、私に？」

「バカ、夕子と俺は床が抜けるのを心配してただけじゃないか」

「あ、そうか」

「原田さんにですよ、やはり本当の刑事さんは凄
いと言いましてね」

「お、俺にですか！女の子でしょう」

「いや、男の子ばかりですが、あんな刑事さんにな
りたいなどと言いまして」

「キヤハ、原田さん残念でした、でもよかったじ
やない、ロリコンにならなくて」

「それはないですよ」

「で警部さん、今日はどう言うご用件でしょ
う？」

「いや夕子、あつこの永井助手の希望でして」

「校長先生、これを」

夕子は提げて来ていた包みを開いた。

「ああつ、こ、これは！」

「そう緑龍の花瓶、そこの戸棚に入ってたものです」

「な、何だと！」

驚いたのは校長だけではない、私も原田も思わず声をあげてしまった、しかし花瓶は無残にも二つに割れてしまっている。

「夕子、どう言うことだ！」

「これからお話します、仮にA子ちゃんとB子ちゃん、それにC君、あの日この部屋の掃除当番だったのですね、ここの清掃は用務員さんなので、ごみ箱のごみを捨てに行くなどの手伝だけ、だか

「いつも当番は三人だけだったと聞いています」

「今日は掃除しなくていいんだろう」

「ええ、用務員のおばさん、学生さんたちの給食の世話で忙しいからって、教頭先生が言ってた」

「刑事さんたちはここで給食食べるのよ、汚れてないかしら」

「綺麗だわ、でも寂しいと思わない、お花でも生けたら」

「でも花瓶がないじゃない」

「ほら、あそこの戸棚の中」

「わあこれ綺麗、C君、お花取って来てよ、学級園にいっぱい咲いてるから」

「よし行ってくる」

「どうしたんだ？」

「割れたの、水入れてきて机に載せる時にね、手が滑っちゃった……」

「早くかたづけろよ、刑事さんたちもうやって来るぜ」

「ええ、で、でも……」

「泣くな、そうだもう教室へ帰れ」

「どうして……」

「いいから早く」

「で、一人になったC君は、水をふき取ったモップの柄でガラスをガチャンと」

「な、何と言うことだ、それじゃあ……」

「私ね、C君に会ったの」

「ねえC君、ガラスを割って泥棒に見せかけた
んでしょ、でもそれ凄いや」

「……」

「女の子をかばったんでしよう、君は男だもんね、
そんなことが出来る男の子って私大好き！」

「あ、あの……」

「いいの、Aちゃんが好きなの、それともBちゃ
んかな？あつごめん、どっちでもいいわね」

「う、うん……」

「君は頭もいいし、凄いやけど一つ失敗」

「……？」

「それはね、せつかくかばったのに、二人の心に
秘密をつくってしまったこと、よくない秘密ね、
大きくなって思い出しても嫌な気持ちになっ
てしまおう、隠さないといけない秘密」

「あつ！う、うん…」

「失敗つてだれにでもあるのよ、だから隠さないでもいいの、そうすれば、あの時失敗しちやつたな」と笑えるような思い出になるわ、ねえ先生に話したら、みんなの前で話すことはないから、みんなが下校した後でいいわ、三人一緒でね、そうして二人には笑える思い出にしてあげようよ」

「は、はい…」

「担任の先生は深川先生ね、いい先生だわ、最初は驚いてたけど、先生、子どもたちの親切な思いやりの気持ちと、花瓶の値段、どっちが価値のあるものでしようと言ったらすぐ私に賛成してくださいって、子どもたちには『よし、後は先生が引き受けた、何にも気にしないでいいよ』って」

「しかし夕子、どこから子どもたちの仕業だと？」

「M署が追っている犯人は解錠が得意なんでしょ、校舎の玄関、この部屋と易々入って、なぜガラスを壊す必要があるの、解錠はこの戸棚が最も簡単なのに、と言うことは窃盗犯ではない、イコール犯行は夜中ではないと言うことね」

「ああ、確かにガラスが壊されていたのが、最大の謎だった」

「あの日、校長室にも隣の職員室にも誰もいなかった時間ね、演劇の間も職員室には教頭先生と用務員さんがずっといたのよ、教頭先生、隣でガラスが壊されたのなら音が聞こえなかったはずがないとおっしゃってたわ」

「ううん？」

「だから清掃の時間、校長先生は私たちと一緒にだつた、用務員さんは児文研や私たちの食事の用意のため炊事場に、他の先生や教頭先生は清掃の見回り」

「なるほど」

「でも夕子さん、それだけで？」

「まだあるわよ、床が湿ってたので変だなと思つたの、そうしたらモップの繊維が落ちていたし、床には小さな傷も付いてた、で、掃除用具のロッカーの中を見たらモップも雑巾も濡れていた、あの日掃除はなかったはずなのに」

「そうか、それで床を調べていたのか」

「決定打はね、花瓶があつた場所にガラスの破片が落ちていた」

「うん？どうということだ？」

「ガラスを割って花瓶を持ち出したのなら、花瓶のあった場所に破片が落ちるわけないでしょ、ガラスは、花瓶が持ち出された後に割られたのよ、M署は窃盗犯の仕業と見て指紋探しに夢中になってた、だから見落としたのね」

「なるほど、そう言うわけですか、よくわかりました、しかし深川君はなぜ私に報告しないのだろう、なんと言っても緑龍の花瓶だ、いろいろと始末もあるし警察のことも…」

「校長先生、M署の方はご心配なく、課長さんに頼んで、本庁の担当から『学校の件は解決済だ』と伝えてもらっています、深川先生には、しばらく内緒にしてと私が頼んだの」

「夕子、どうしてだ？」

「少し気になることが残ってたのよ」

「先生、お邪魔していいでしょうか？」

「何だ？ああ君は、確か永井君だったな」

「えっ、覚えてくださってたのですか、私、先生の講義は日本美術史の一つしか取ってないのですが」

「ああ君は印象に残っている」

「じゃあ、やはり私って！」

「こら、優秀だったからでも美人だったからでもないぞ、君ぐらい講義中によく居眠りをする学生は珍しかったからだ」

「キヤ！」

「ハハハ、で、何だ？」

「これを見ていただけじゃないかと…」

「おっ、そ、それは！緑龍ではないか！うん？割れたのか、惜しい…」

「先生、これ本物でしょうか？」

「何？そう言うことか、それなら簡単だな、わけを知っていれば子どもでもわかる、貸してごらん」

「えっ、そんなに簡単にわかるのですか？」

「ああ、だめだこれは……」

「やはり贋作……」

「うん、贋作と言っても悪意のある偽物ではない、これは弟子の作品だ」

「どう言うことでしょうか？」

「緑龍の神髄は絵付けだ、かれの絵付けは神業とさえ言われている、絵付けはわかるだろう」

「はい、素焼きの上に釉薬で絵を描いていく」

「そうだ、その技を弟子に教えるために、彼は独特の方法を取った、自身の作品をモデルにして、

同じ物を作らせるんだ」

「模倣ですか」

「そうだ、絵付けだからまあ模写だな、しかし釉薬は、絵画の絵具と違って焼いて見ないとどんな色になるか分からない、師の作品は完成品だからすでに色がついている、その色を出すためにはただの模写では済まない、緑龍は、これによって絵付けの技と焼成の技術を弟子たちの身に着かせようとした」

「それじゃあ模倣した作品が数多くあるのですか」

「ああ、弟子は六人いたそうだが、それぞれが何度も繰り返す、試行錯誤の連続で同じ物をいくつも作った、ほら足の裏を見てごらん」

「はあ……？は、はい……」

「おいおい、靴を脱いでどうする、ハハハ！居眠りしてたからだな、花瓶の底の部分だよ、花瓶や壺の部分は人体に例えて呼ぶ習慣だ、一番下が足でその上が腰だな、その足の裏だ、底の外側だよ、私は教えたはずだぞ」

「キヤツ、は、はい：あつ何か記号のようなものが書いてあります、漢字のような象形文字のようなな」

「それが弟子の内の誰の作品かを示す記号だよ、同じ形の素焼きの上に同じ絵を描くんだろう、目印がないと焼き上がって誰の物か分からなくなってしまうからね、本物は緑龍独特のサインが入っている、だからこれを入れた悪意のある贋作なら鑑定は難しいが、弟子の模造品かそうでないかはすぐわかるわけだ」

「で先生、これは市場価値としていくらぐらいでしょう、割れていないとして」

「まあ、一、二万から高くて四、五万と言うところだ、本来市場に出してはいけない物だが、緑龍の死後、ある関係者が持ち出してしまった、ところで永井君、君がなぜ緑龍と？」

「実はこれこれで・・・」

「ほほう、それは面白い、君の足の裏を見たらもつと面白かったかな」

「と、言うことなのです、足の裏を見て下さい
「足の裏だと、そんなものを見てどうする」

「(フッフ教授とのそのあたりの話は端折ったのね) みんな靴下は脱がなくていいの、花瓶の底よ
(我ながらよく言うわ)」

校長は知っていたようですぐ底を眺める、

「その記号は磐田という人の作だと、教授が本で調べてくださいました」

「どう言うことだ？緑龍は弟子の作品を寄贈したと言うのか」

「夕子さん、まさか…あつ、じゃあ…」

「うん原田、その通りだ…しかし…そうだと夕子、気になることがあったからと言ったな、何だったんだ？」

「こここの戸棚の中の物はほとんど動かされてないのでですね、特に花瓶を飾られていた右側の方は、優勝カップなんかもずっと以前の物だし、で、持ち上げるとね、底の形が棚板に綺麗に出来てるの、いつも光が当たるところと影になるところの差でしょ」

「ああ、この戸棚自体がかなり古そうだしな」

「二、三のものを持ち上げて見たのだけど、みな同じね、ところが花瓶の後だけが違ってた、後が二つあるの、一つはほとんどわからないかすかな物だけど」

「それが？」

「花瓶だけは動かされたことがあると言うことよ、で、ここの在籍が一番長いと言う用務員さんに聞いて見たのだけど『あの花瓶が外に出された記憶はありません、私はガラスをよく拭きますが、戸棚を開けたことは一度もないですし、行事か何かで出されたこともないはずです』だって、教頭先生も『私がここに赴任してからですが、記憶する限り動かしたことも、出したことも一度もない』って、これどう言うこと？」

「夕子、そんなことまで調べてたのか、どこで何をしているんだらうと…」

「それで待ち切れず、原田さんのサイレンが鳴ったのね、フフみんな驚いたのじゃない、私もそれを聞いて何事かと駆けつけて」

「よ、よしてください、夕子さん…」

「ほら原田さん、ファンが廊下でお待ちかねよ、女の子の声も聞こえてる、よかったわね」

「教授がある中学教師から聞いた話だそうですけど、高価な花瓶や壺の寄贈って、学校にとっては迷惑なのだそうですね、いくら高価だと言っても学校が勝手に換金していいわけではないし、高価で貴重なほど、取り扱いや管理には気を配らなければならぬし、普通に使える物ではないから

校長室や応接室の飾り棚に飾られる程度、子どもたちの目に触れることもほとんどない、中には金庫に仕舞い込んで何年もそのままという例もあるのだそう、花瓶にせよ壺にせよ本当は花などを飾ってこそ生きるのに、大抵は文字通りの死蔵だつて：あつ、ここからの話、私の空想です、何の根拠もないのだから、妄想の方がいいかしら：」

「ある陶芸を趣味とする方が緑龍に興味を持った、しかし緑龍は作品が少ない上に、収まるところに収まって市場に出ることはほとんどない、出たとしてもそれは、一般の人が手を出せるような値ではない、だから弟子の模造品を見つけて、自宅の応接間にでも飾ったのじゃあないかしら、『緑龍ではないですか！』と客は驚いたでしょう

し、そうなることが嬉しくもあつた、でも心は空しかった、本当は模造品に過ぎないとわかつているのですから、ところがある時、本当の緑龍を目にした、それも自分が持っている物の手本にしたに違いない作品を！『わかるはずはない、使われることはないのだ、貴重品としてただ飾ってあるだけだから…』いつの間にか本当の緑龍が自宅の応接間に飾られた、でもやはり空しかったと思います、『これは模造ではないぞ、本当の緑龍だし、しかし…』って」

「あつ、変なことお話ししてお邪魔してしまつたわ、その花瓶はお返ししておきます、恭…じやなかつた、警部、失礼しましよ」

「ああ、原田はどうしてる？」

「ほらあそこ、グラウンドよ」

「何やってるんだあいつ、走り回って」

「ケイドロよ、あまりいい名前の遊びじゃないけど、よくやったわ、キヤハ、原田さん女の子に捕まえられて大喜び、やはりロリコンじゃない」

校長は辞職した、一身上の都合だと言う。

M署の包囲網は幽霊にならず、見事犯人を逮捕した。

犯人が捕まったのだから、花瓶が戻ったのは当然だと、どの先生も思った、ただ一人、深川先生だけは首をひねった、

「えっ！どうなってるのこれ？ボンドか何かでくっつけた…あの刑事にしては変な女の人、あの人なら平気でやりそうだったけど…でもまさか」

いや驚いたのは深川先生だけではなかった。

「あれっ、花瓶がもとに返ってる！」

「本当だ！どう言うこと？」

「変よこれ、割れていない……」

「私たちが正直に話したので神様が……」

なんてことを、今の子は言わない、

「わかったわ！深川先生、ホームセンターで買って来たのよ」

了

贗作幽霊包囲網

<http://p.booklog.jp/book/107951>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107951>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107951>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ